教育開発支援センターからのお知らせ

学生による授業評価アンケート　～実施率が改善されました～

2012年度における授業評価アンケートは、前年度までに比べて実施率がかなり高くなりました。ここに言う実施率とは〔実施科目数／実施対象科目数〕のことです。過去4期の数値は、2010年春学期に60.5%、同秋学期61.7%、2011年春学期47.6%、秋学期49.0%…というように、概ね40～60%前後を推移していましたが、2012年度に入ってからは春学期81.9%、秋学期81.0%というように80%を越えるようになりました。

2000年より試行的に実施されてきた授業評価アンケートは、2011年春学期に、アンケートタイプや質問項目の変更、科目担当者へのフィードバックシートの作成、紙方式への統一など、大きな改訂をしました。実施率の他にアンケートの回答率（回答者数／履修者数）も高くなってきているので、改訂の効果が現れてきていると考えてよいのかもしれません。とはいえ、真の効果は授業評価アンケートの結果を参考に、授業の維持や改善がなされることにあります。作成したフィードバックシートにはそのような情報が得られるような工夫が施されています。どうぞ、ご活用くださいますよう、お願い申し上げます。なお、教育開発支援センターではactive learningを実現するためにPBL型授業の普及を視野に入れています。今後、このタイプの授業科目が増加した場合に新たなフォーマットを検討するつもりでいます。その折りには要望やリクエストをお寄せ下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

（教育推進部　三浦真琴）

新シリーズのランチョンセミナー（第一期）が終了しました

前回、ご案内申し上げたランチョンセミナー（教育開発支援センター主催）の新シリーズ『グループワークをはじめませんか?』は平成24年12月7日に第3回、12月21日に第4回、同25年1月11日に第5回（ランチョンセミナーとしての通算は第11回）を開催し、シリーズの第一期を終えました。前号のNewsletterではシリーズの第1回目ならびに第2回目についての報告をいたしましたので、今号では、残る3回についてご紹介いたします。

シリーズ第3回目は平成24年12月7日に『グループワークに向けて“HOP STEP JUMP”』と題して開催しました。この回及び続く第4回には化学生命工学部の片倉啓雄先生を講師としてお招きし、“World Cafe”の手法を、どの学生もがミッションを遂行するように（フリーライダーが発生しないように）アレンジした工夫についてお話し戴きました。このうち、第3回目は「ワールドカフェ開店に向けて」、すなわちグループワークに向けての準備についてご丁寧な説明を頂きました。片倉先生は大学の学部教育で身につけるべき能力は就職活動で必要となる能力につながるものであるから、グループディスカッションに積極的に参加することには大いに意義があると伝えます。そして批判や失敗を怖れたり、回避しようとしたりする傾向にある学生に、失敗しないと経験値はあがらないこと、批判されないと考えは深まらないことを理解させます。また授業の随所でクリッカー（オーディエンス・レスポンス・システム）を用いたり、学生にとって身近なトピックスを引き合いにだしたりして、学生たちがそれとは気付かないうちに授業に参加する雰囲気を作ります。このような働きかけが実はアイスブレイクの役割を果たしているので、わざわざアイスブレイクと銘打って何か特別なことをする必要はないとのことでした。続く第4回目は同年12月21日に『グループワークに向けて“HOP STEP JUMP”』と題して開催しました。この回はWorld Caféのアレンジについてお話し戴きました。一般的なWorld Caféのスタイルは4名からなるグループでのダイアローグ（あるいはディスカッション）を終えた後、3名が隣のグループに移動し（相対的には1名が反対側にある隣のグループに移動するのと同じことなのですが）、移動した者は自分のグループでどのような話題が登場したかなどを隣のグループに伝えます。3名（もしくは1名）のビジターを迎えた隣のグループは自分たちのグループでどのような話し合いがなされたかをビジターに伝えます。そのような伝達作業を終えた後、移動した3名（あるいは1名）は最初のグループに戻り、出先で聞いた情報などをグループメンバーに伝えます。こうすることによってグループは両隣のグループでのダイアローグ（あるいはディスカッション）の内容を知ることになり、会場全体の意見を集約するに当たって有益なステップを刻むことになります。片倉先生がご担当のクラスには105名の受講生がいるので、それぞれ7名からなる15のグループを編成します。このうち1名に司会の役割を、他の2名には説明者、さらに他の2名にメッセンジャー、残る2名には発表者としての役割を与えます。2名いる説明者のうち1名は自班の討論内容を来訪者に伝えます。残る1名は来訪者からの情報をその場にはいなかったメッセンジャーに伝えます。メッセンジャー 2名のうち1名は訪問先で自班の討論内容を説明し、残る1名は訪問先の班の討論内容を自班で説明します。2名の発表者はメッセンジャーと説明者から得られた情報を必要に応じて取り込みながら自班の討論内容を翌週の授業時に発表します。このようにメンバー全員にミッションが課せられているので、それぞれのミッションに応じた役割を遂行すべく、どの学生も考えて行動するようになるのが、片倉流World Caféの重要にして有意義なポイントです。

年明けの1月11日には『グループワークのNEXT STAGEへ』と題して、このシリーズ第5回目のセミナーを開催しました。この回には商学部の長谷川伸先生を講師にお迎えし、「計算問題でもグループワークが効果的!」というテーマのもと、1年次向け専門教育科目の授業で実践されているグループワークをご紹介いただきました。セミナーでは需要供給曲線に関する計算問題を例に出して、通常の授業ならパーソナルワークのみを展開して進んでいくところを、ここにグループワークを介在させることで、学生の理解を助けたり、深めたりすることができるとのお話でした。計算問題を苦手とする学生にとっては、その問題を理解している学生からのアドバイスやサポートを受けることにより、その理解が助けられることになります。教師よりも身近な学生に説明してもらう方が苦手の原因やつまづく箇所に気付きやすく、あるいはそれを質問しやすいので、このようなグループワークはかなり効果的です。また、既に課題を理解している学生も他者に説明することを通して、さらに理解を深めることができます。このようにグループワークは、いずれの学生にとっても教育効果があると考えられます。グループワークを展開するに当たり、提示された問題へのアプローチや解答までのプロセスなどを勘案して、良問を用意しなければならないと考えがちですが、長谷川先生が提示されたように、シンプルな計算問題でも十分にグループワークを活用し、教育効果を上げることができることを銘記したいと思います。

なお、ランチョンセミナーの様子は以下のWebページでご覧いただけます。

http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/outline/ict01.html

また、今後も同種同様のセミナーを開催していきます。ご要望、リクエストなどございましたら、教育開発支援センターまでお寄せ下さいますよう、お願い申し上げます。

（教育推進部　三浦真琴）